

国史跡
竹田城跡

兵庫県朝来市和田山町
但馬乃国「虎臥城」



発刊にあたつて

ようこそ、和田山町へ

和田山町の誇る「竹田城跡」を中心に竹田を散策される方々に、ぜひこの本を参考にしていただきながら、「国史跡 竹田城跡（別名・虎臥城）」・「寺町通り」・「山桜の立雲峠」・「山城の郷」などをじっくり散策してくださいますよう、案内申し上げます。

この「竹田」の町は、中世の時代から交通の要衝の位置にあり、但馬の重要な戦略基地の城下町（市場町）として栄え、明治・大正・昭和の初期までは、朝来郡一帯の中心地として大いに栄えてきましたが、鉄道の開通により現在の姿に至っています。

大分県竹田市には、「荒城の月」で有名な岡城跡がありますが、高い凧から見た型が牛の伏せた型に似ているところから別名「臥牛城」と呼ばれています。また、和歌山城も「虎伏城」又は「伏虎城」と呼ばれ、和田山町の竹田城「虎臥城」とよく似た呼び名となっています。

それでは、ロマンの戦国時代ヘタイムスリップの旅へ出発です。

まず一步を踏み出しましょう。

平成十二年四月

和田山町観光協会

目次

- 一 日本一の山城（遺構）
- 一 織田信長と穴太衆
- 二 穴太積みの起源
- 二 栗田純司氏のことば
- 三 國の史跡指定
- 四 昭和の石垣修復
- 五 竹田城の歴史
- 六 中世の竹田城
- 七 近世の新しい竹田城
- 八 赤連の城主「赤松廣秀」
- 九 赤松廣秀と藤原惺窓、姫流
- 十 竹田城の崩壊
- 十一 お城まつり
- 十二 竹田城のみどころ
- 十三 竹田城の石垣
- 十四 竹田城を歩く
- 十五 大手口
- 十六 大手口から観音寺山の出丸
- 十七 北千畳から本丸と平殿
- 十八 本丸と天守台
- 十九 南二の丸から南子骨
- 二十 花屋敷（花殿）・井戸跡

十一

遺構群
堅堀群

石取り場

太田垣氏居館推定地

十二
城跡からの眺望

登山道

城下町の移り変わり

竹田城に関係する寺院・神社など

いにしえの郷

昭和の竹田の町づくり

平成の幻の竹田城

ふるさと散策

二十一
観光コース

二十二
地場産業と特産品・お土産

二十三
あとがき





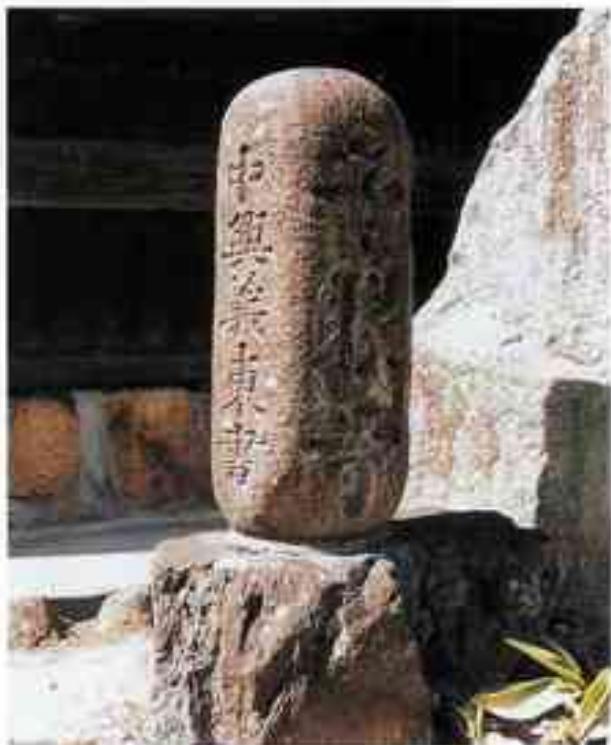
明治九年作成の竹田城絵図（竹田区所蔵）



法宝寺御札 (和田山城)



竹田城付近にある御標
(右：たけのやみち／左：はりまみち)



大路山から移された千眼寺跡碑 (法樹寺境内)

一 日本一の山城（遺構）

一 繩田信長と穴太衆

元龜二年（一五七一）の比叡山の焼き討ちで、信長は穴太積みの存在を知り、天正四年（一五七六）正月に着工した安土城の築城に、初めて穴太衆を動員したことになっています。安土城に起用されて以来、石垣積み技術集団・穴太衆の名は「躍天下に知られる」ととなり、信長、秀吉、家康へと穴太衆の起用が引き継がれ、竹田城をはじめ越路城、大坂城、伏見城など全国の数多くの城でこの技法が採用されています。

また、山頂に築かれた山城は、看桜城、鷲伏山城、安土城、津和野城など国内に數多くあります。城の周囲を完全な石垣で構築され、今なお築城当時の姿をそのまま残している竹田城跡は、全国的にも大変貴重な城跡遺構となっています。

二 穴太積みの起源

穴太衆の起源は、穴、阿那（安那）からすぐに連想され、大陸からの渡来人といわれております。比叡山系と琵琶湖に挟まれた大津市北郊地帯に、六世紀ころから七世紀初頭にかけて渡来人が築造したと推測される「野バラ石の乱積み」という積築法による一千を超える数の古墳群があります。



穴太衆は、これら横穴式古墳の石室づくりに習熟していた渡来人の子孫として、長い間高度な石積み技法を温存していたと思われます。

三 粟田純司氏のことば

竹田城跡の石垣を修復（昭和の修復）された穴太衆の末裔の粟田純司氏（滋賀県大津市坂本・穴太流十四代当主）の話によれば、「全国の山城の中で、このように完全な形で保存されている総石垣の竹田城跡は「わが國でも屈指の山城」の遺構である。」

また、今まで赤松氏により築城されたと言われているが、このような大規模な城郭の普請ともなれば、二万二千石の小大名の事業としては荷が重く、おそらく天下人の豊臣家から戦略的意図により、財政面で大きな支援があつたのではないか」と言わわれています。

二 国の史跡指定

竹田城跡は、JR播但線竹田駅（兵庫県朝来市和田山町竹田）の西側に聳え立つ古城山（三五三メートル）の山頂に築かれた近世初期の山城遺構です。



竹田城と安井ヶ

この城跡は、全国的にも屈指の山城遺構として、昭和十八年九月八日、「史跡名勝天然記念物保存法」に基づいて国の史跡に指定されました。その史跡指定の理由に次の記録が残されています。

「円山川（朝来川）の左岸なる山上にあり、一に虎臥城と称せられ、嘉吉年間、山名持豊（宗全）の築城にかかるものと云う。後、その臣太田垣氏四世之に居り、天正八年（一五八〇）桑山氏の居城となり、同十三年（一五八五）、赤松広通の拠る处となりしか長五年（一六〇〇）十月、城主鳥取に出陣中自刃せるによりて廢城となれり。」

城高は、三五三メートルの山頂を削平して本丸を築き、これを中心として東西約五十間、南北二百五十間の部分に階段状に石頭をめぐらし、その中に城櫓、城門を配し、あたかも飛鳥の双翼をひろげたるが如く、北端に近く北千枚敷あり、南端に接して南千枚敷ありて円山川渓谷一帯を制圧するの位置にあり、石垣を存する山城として極有のものなり。

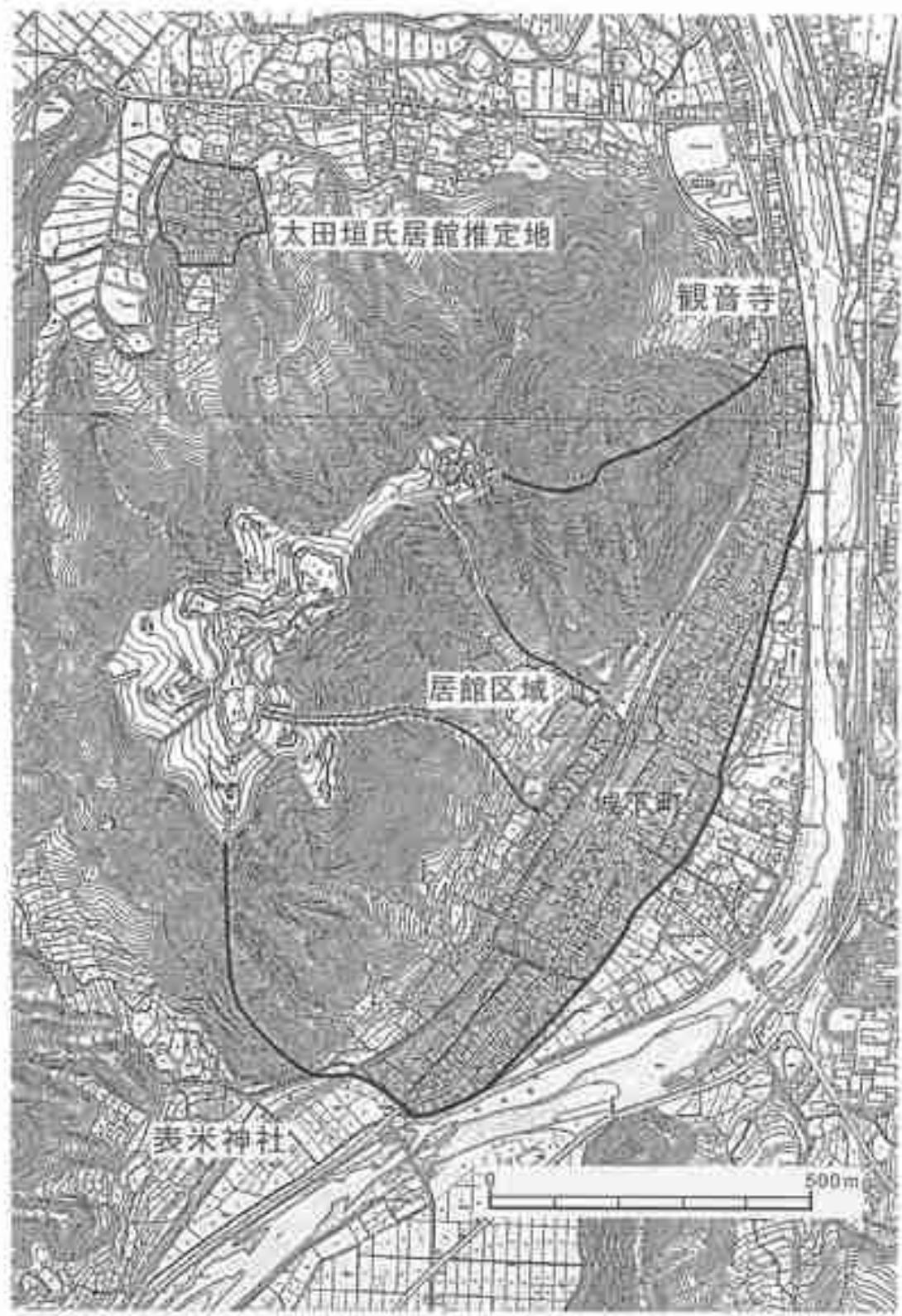
朝来郡竹田町竹田字古城山「六九番地」と記す。

指定当時の面積一町八反五畝十九歩

以上



雨干石からの大谷口



竹田城と城下町・西側

二 昭和の石垣修復

和田山町は、国庫の補助を受け、昭和四十六年度から昭和五十五年度の間に、六,四〇〇万円の事業費をもって石垣の削壠箇所の大修理を行い、築城当時の姿に復元しています。

この修理にあたっては、文化庁神野浩調査官、國立館大學黒板昌夫教授らの指導を受け、施工は国の指定業者、穴木謙石垣師栗田万喜三氏（滋賀県大津市坂本、穴木流十三代当主）を指名し施工しています。

なお、現在の竹田城跡は文様・慶良のころ補強改修して南子登などを主張されているという説については、石垣の修復を担当された栗田万喜三氏の説や、地元に残された史料（和田上道氏日記）などとも符合しているところです。

なお、この事については、昭和四十五年修復に立ち会われた文化庁の調査官と栗田万喜三氏並びに町間筋者との間で、南子登と南門、花屋敷と北下段の塗め手は當時未完成であったことについても確認されています。

四 竹田城の歴史

昭和三十年代頃までは山名宗全時代の遺構であるといわれてきましたが、最近、城郭研究家や歴史家などの調査研究の結果、現存する石垣は、山名氏の築城したのではなく、天正初期から築城に至るまでの間に、山名氏時代の城城（上堅）にて、近世式の城郭を樹立した遺構であるといわれるようになつてきました。

一 中世の竹田城

山名持豊（宗全）による城づくり

竹田城の歴史は、当時但馬守護であった山名持豊（宗全）が承暦三年（一四三二）、播州の赤松氏や丹波守護の細川氏に对抗するため、播磨・丹後・但馬の交通の要衝である竹田の地に、殿村を大手とした「安井ノ城」（和田上道氏日記）を太田城



佐久野古戦場と内藤家

光景に構築を命じ、一三か年の歳月を費やして嘉吉三年（一四四三）に土塁をめぐらせた城を完成させたことからはじまっています。（口碑）

この地に城を築いた山名宗全は、部下の四天王の一人で、朝來、養父両郡を本拠とする太田垣光景を初代の城主に命じたと言われています。しかし、光景の名は確たる史料に見出することはできず、太田垣誠朝が初代城主とも考えられている。

応仁の乱（応仁元年、一四六七）の時、竹田城の城主太田垣景近は、長男とともに京都に赴いていました。その留守中に、丹波主護細川氏の臣 内藤孫四郎、長九郎左衛門らが軍を率いて竹田城を攻略しようとして京都府境の佐久野に侵入したとき、景近の四男新兵衛尉宗近がこれを奇襲し両将を打ち取り見事に撃退しています。（応仁記）

以来、太田垣氏は七代の長きにわたり竹田城主として君臨します。

二 近世の新しい竹田城

織田軍（秀吉軍）の但馬進攻

永禄十二年（一五六九）八月一日、木下藤吉郎秀吉が二万の軍勢で但馬を攻撃し、わずか十日間の間に十八の城を攻め落とし、十三日には早々と京都に引き上げています。

その後、織田信長は全国制覇の手始めとして、天正五年

（一五七七）に羽柴秀吉に命じて、播州攻略に手がけました。秀吉は、同年十月播州に攻め入り、わずか一ヶ月たらずの間に播磨の諸将から人質を取つて帰服させることに成功しています。

羽柴小一郎秀長の竹田城攻略

天正五年（一五七七）、その勢いに乗じた秀吉は、弟の小一郎秀長（後の羽柴秀長）に三千二百余人の兵を与え真弓峠（現生野町）を越えて但馬に撃ち入らせています。山口（現朝来町）の岩州城を攻め落した秀長は、十月、太田垣土佐守の居る竹田城に攻めかかり、竹田の在をに火を放ち鉄砲三百挺で攻撃し、わずか三日間で攻略しています。

この作戦のねらいは、当時銀を多く産出する日本一の生野銀山の確保と、中國の毛利氏に対抗するためといわれています。また、秀吉は朝来、養父の両郡の確保と近畿以西の要として、弟秀長を城代として入れ、竹田城の首領を命じています。

羽柴小一郎秀長の城普請と道路普請

秀長は、朝来郡の近郷の村々から約三千人の民百姓を集め、養父（養父市場）→高田、和田山→竹田、竹田→山口、山口→真弓を経て播州栗賀までの道路を一冬の間に完成させると



竹田城跡からの生野谷通景



城跡からの城下町

もに、三千人の人夫のうち千人を竹田城の普請にあて、武将達にはそれぞれ工事区間を分担させ工事を行わせています。（信長公記、武功夜話、山口家文書）
築城の名手として有名な武将藤堂高虎が竹田・和田山間の工事を担当していましたことから、竹田城の普請にもかかわっていたものと考えられています。
秀長は秀吉の異父弟で終生秀吉の重要な補佐役であつたことから、既存の竹田城は少なくともその主要部分の普請と、城下町としての竹田の町づくりを行つたものと考えられます。（栗田万喜二氏説）

城主 桑山修理太夫重晴

天正八年（一五八〇）四月には、秀吉の命により秀長は六千四百人の軍勢で但馬に攻め入り、但馬一円を平定後出石城に城主として入ります。その後、天正十年には竹田城に桑山修理太夫重晴（一万石）が城主として入ります。

重晴は、秀長の部将の一人として各地に転戦し、幾ヶ岳の戦いで武功を挙げたことは史書に残されています。さらに、天正十三年（一五八五）には、紀州を平定した秀吉の命により、秀長が領した紀伊・和泉のうち、和歌山城代に封じられています。

五 悲運の城主 赤松廣秀（斎村廣英）

天正十三年（一五八五）八月、桑山重晴の後を繼いだのは播州赤松一族の赤松廣秀です。赤松廣秀は、天正五年（一五七七）、秀吉の播州進攻のときは、播州龍野城の



竹田城とその周辺

城主でしたが、戦わずして城を明け渡し平野郷佐は（現在のたつの市）に蟄居しました。その後、秀吉に願い出を行い疋須賀正義の配下に入り、中國攻めや四国攻めに加わりその功を認められ、竹田城主（二万二千石）に命じられています。時に慶秀二十四歳。

慶秀は、同年九月、秀長が手がけていた竹田城の普請を引き継ぎ行うため、着任後ただちに地鎮祭を行い城の改修工事に着手し、最終的には慶長五年（一六〇〇）までの間に工事を行ったものと考えられます。（慶秀遺品の竹田城地盤石や、中島新右衛門獻上の竹田城瓦に、天正十三年（一五八五）九月の銘が刻まれている）

また、慶秀は小田原城攻めや、一度にわたる朝鮮出兵の文禄の役（一五九二～九三）に約八〇〇人、慶長の役（一五九七～九八）にも約八〇〇人の兵士を従え但馬の諸大名と共に参破した記録（中川家文書・太閤記）が残っています。

関ヶ原の戦い

慶秀は、慶長五年九月（一六〇〇）関ヶ原の戦いに先立ち、小出大和守らと共に東軍方の細川氏の守る丹後守道城を攻めましたが、そのとき関ヶ原の戦いにおいて石田三成の西軍が大敗したことを知り、軍を率いて竹田城に撤退しています。

鳥取城攻め

その後、慶秀は因幡・鹿野城主毛利武藏守益矩から、西軍方の鳥取城（宍粟郡兵部少輔）を攻めているが罪攻しているので、米接されれば徳川家康に贈

んで西軍に組したことについては許されるよう執り成してやるとの連絡を受け、直ちに軍を率いて鳥取に攻め入り見事に鳥取城を攻略しました。しかし、城闇中に城下に火を放ち市中を焼いたというかどで家康の怒りにあれば、慶長五年十月二十八日、廣秀は鳥取の奥教寺において無実の罪をさせられたまま自刃させられています。（戒名一乘林院藏可翁松雲大居士）時に廣秀享年三十九歳。

嘉吉三年、山名宗全がこの竹田の地に「安井ノ城」を初めて築き、その後、天下人の豊臣秀吉による竹田城築城から一六九年日にして、空しくも「天下の山城」は廃城となり、「武士の夢の跡は」草木の森となつて消え去っています。

仁政の主君

赤松廣秀は、天正十三年から慶長五年までの二五年間、竹田城最期の城主として朝來郡・養父郡内の二万一千石を領有し善政を行ひ、民に「仁政の主君」として恐れられていました。

惜しくも自刃された鳥取城近くの葬られた所には、赤松八幡神社として大切に祀られており、また、近くの奥教寺（鳥取）には、過去帳が保存されています。

一方、但馬では、領民が廣秀の死を悼み、養父郡八鹿町大森の地に「腕塚」を、和田山町竹田の法樹寺には「供養塔」を建立し、今でも香と花のとぎれる間がないほど大切に祀られています。

六 赤松廣秀と藤原惺窓、姜沆

赤松廣秀は、近世儒学の祖である藤原惺窓（播磨美嚢郡細川荘出身）と早くからの知人で、その勉学についても経済的援助を行っていました。また、慶長の役（慶長二年）で捕虜となつて日本に連行された朝鮮の儒学者姜沆に儒学の教えを講じとともに、「四書五經」を静書させるなど、惺窓朱子学の普及振興に大いに寄与しています。

また、姜沆は廣秀のために袖珍本（小判本）十六種を自筆で作成し手渡しています。廣秀は姜沆にそのお札として贈一隻と食糧を用意し、姜沆の家族一〇名とその他を合わせた二八名の帰國への協力を行つたことは有名です。（看半錄）

このことは、廣秀が城主として農業や養蚕を興し、鉢下を紡織物の産地として、また、城下町竹田を漆器産業の振興にも尽くしたことと無関係ではなく、廣秀を「仁政の君」と尊び、民が行う祭礼（お城まつり）は儒学者藤原惺窓の説いた儒教の教えであると、今でも語り継がれています。（看羊録）

七 竹田城の崩壊

城主の赤松廣秀がこの世を去つてから、家康の命により竹田城を山名豊國（伊馬村岡城主）が没収し魔城となりました。その後、主なき竹田城の破壊・崩壊は全く手のつけようがなく、城柵はすっかり取り壊され城門をはじめ各御殿、本丸、天守閣に至るまで、城下や近隣の百姓達が略奪し破壊するままであつたといわれています。

赤松廣秀が家康の怒りに触れ自刃しなければ、この名城も今日のように石垣と瓦の破片のみ残すような悲惨な目にあわなくともすんでいたのではないかと残念でなりません。

また、かつての宿敵同士であった山名家と赤松家が、幾星霜の歳月を経てそれぞれの子孫が和睦を結び、平成元年に駐車場横の谷の一角に碑が建立されています。



赤松廣秀供養塔（和田山町竹田法極寺）



赤松廣秀供養塔「聯壁」といわれる（八鹿町大森）

八 お城まつり

赤松廣秀は城主として、朝來養父両郡の洪水源に桑を植えることを進め、糞糞を奨励し、城下町の産業振興などに大いに努めたといわれています。また、麻城二百年後の寛政十年三月二十八日（一七九八）に徳川幕府の許しを得て「虎臥大明神」の神号を許されて祀ることになりました。

赤松公の大祭については、寛延二年（一七四九）、天守台に虎臥大明神の小社を建立し行つたのが最初で、以後、竹田地区では五十年毎に大祭が執り行われ、近年には昭和二十四年に稚児行列や山車を中心とした三五〇年祭が臨時列車が出るほど盛大に開催されています。

また、祭礼も大正時代までは、天守台で行われていましたが、近年は麓の歓町集落で毎年四月二十八日（新暦）に祇園に執り行われております。平成十二年四月二十二、二十三日には、「赤松公四〇〇年祭」が町を挙げて武者行列、大堀の獅子舞と屋台の共演、鉄砲隊、フリーマーケット、ペリコプターの遊覧飛行を

現在の家具



中心とした「第一回わだやま「竹田」お城まつり」とともに第七回全国山城サミットも大きな的に開催されました。(第一回も当地で開催)

九 竹田城のみどころ

竹田城の石垣

竹田城の特徴は、本丸中央の天守台（標高三五三メートル）を頂点に、それぞれ南北方面に南千疊、北千疊の曲輪が配され、さらに西側には花屋敷曲輪が配置されています。

そして、三つの曲輪（南千疊・北千疊・花屋敷）の標高はいずれも三三一メートル程の高さとなつており、城郭全体の規模は、南北四〇〇メートル、東西一〇〇メートルで、あたかも大鳥が山頂から西方へ向けて両翼を広げ飛ぶ勇壮な姿となっています。

こうした有利な自然の地を巧みに利用し、山名宗全が嘉吉年間にこの地に最初の土星の城を築き、その上に豊臣秀吉の命により城主となつた赤松廣秀が文禄のころから天下人の秀吉の大きな支援を受け現在の立派な城に仕上げたものと考えられます。



旧赤松廣秀公御跡の米蔵（和田山町竹田城跡寺）



花園象無から見た竹田城周辺図

はもとより民百姓を動員し、人知の限りを頼注してこのすばらしい竹田城を築いたことと思われます。

竹田城の石垣の特徴は、穴太積み技法による石積みとなっていますが、注意して石垣を見ると石垣の各面ごとに積み方が異なっていることがよくわかります。

栗田純司氏の説明によりますと「この城の主要部分の石垣皆諸は、おそらく短かい期間に慌てて工事を行ったものと考えられる。当時は百人を超す石工の頭領を全国各地から動員し、それぞれ頭領に石積みの一角を任せるとともに、その頭領の下に多くの人夫を配し、山頂を中心として周辺から膨大な石材を集め8,649平方メートルの壮大な石積みを完成させたものと思われます。

現在の工事費に換算してみると、数十億円をはるかに越えると思われます。往時の状況を想像してみると天下人（豊臣秀吉）の重要な大事業であったことがうかがえます。」とのことでありました。

十 竹田城を歩く

大手口

大手虎口は、城の表玄関です。この虎口は、竹田城の中でも最も立派な出入口となっています。近世初頭になつてから城の防御性を充実させるために創案された樹形虎口といわれています。

大手口から觀音寺山の出丸

大手見付櫓の石垣下の大走りをさらに北側に急な坂道を下っていくと、觀音寺山山頂の土塁造りの出丸にたどりつくことができ、そのまま昔からの遊歩道を進んで行くと、觀音寺と竹田小学校に下りていくことができます。

北千疊から本丸と平殿

大手口の虎口を入り階段を登ると、まず眼の前に広がるのは広大な北千疊の曲輪です。



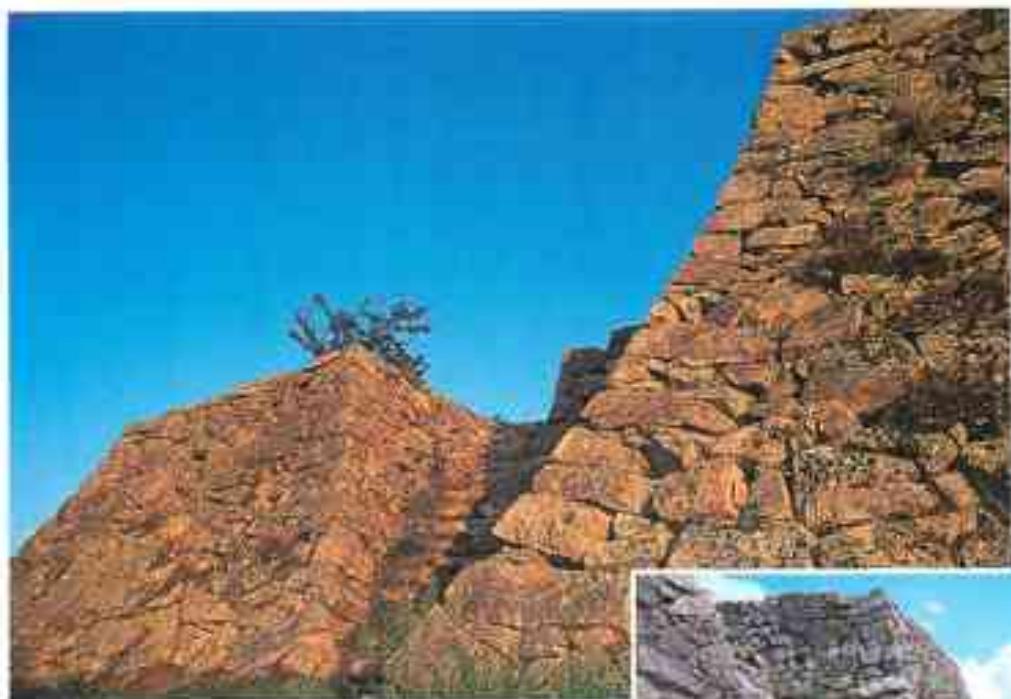
石垣櫓跡遠景上の竹田城跡絵図



南千畝から天守を望む



北千畝から天守を望む



竹田城天守台石垣の「皮り」



この北千畳は、本丸を中心として南千畳と肩を並べる対照的な位置にあります。この北千畳には小さな井戸跡が一か所確認されています。

次に、広い北千畳から本丸、平殿をめざすためには、三の丸に進む樹形虎口と、武の門、二の丸への虎口を通らなければたどりつくことができません。

本丸と天守台

二の丸からいざ本丸へ。本丸北側の側面にあるスロープ状の通路を進むと、本丸の虎口にたどりつけます。この虎口は大手口と同じ「外枠形」と呼ばれる形であります。本丸は、地形に即した多角形で、その本丸の南東部に本丸の石垣ラインから前に一段せり出す形で城下を見下ろすように天守台が構築されており、美しい本丸御殿があつたところです。天守台は、一〇・七メートル×一二・七メートルの規模でややいびつな形となつており、いにしえの壮大な天守閣の建物の健石をいくつかみることができます。

南二の丸から南千畳

さて、本丸の急な階段を降りて南千畳へ向うと、

南二の丸に至るまでに比較的大きなくい造りに造られた樹形虎口があります。この平殿には、全国でただ一つの大変貴重な「くい造りに造られた檜台の石積み」があります。

次の南千畳は、北千畳と位置的には対に、同じ高さに設けられている曲輪です。後で説明します花屋敷と同様の内ふところに二か所の虎口をもつことで共通しています。

この二か所の虎口のうち東側の虎口には、なぜか石垣が施されていない部分がありますが、栗田純司氏の話によれば、「この部分には基礎工事を行つた形跡はなく、当時、南千畠と南門などは未完成であったと考えられる」とのことがありました。

花屋敷（花殿）・井戸跡

さて次は、南千畠から降りてもと来た道を戻り、本丸西側から花屋敷へ下りてみましょう。花屋敷へ降りる道は、今までの道とは異なり急な坂道となっています。造成前の地形はかなりの断崖であったと思われ、この花



平殿、南二の丸樹形虎口



北千畳の井戸跡



花屋敷の曲輪



三の丸下の井戸跡

屋敷曲輪の大きさを確保するために、大きく削平したものであろうと推測することができます。特に、この花屋敷には他の曲輪にはみられない、見事な鉄砲用狭間が築かれ堅固な防御設備となっていることが特徴的です。

次に、この花屋敷の北側から三の丸下の谷に向かって少し下っていきますと、石垣で囲った井戸跡にたどり着きます。

花屋敷の南側で南一の丸下にも井戸があり、地元には古くから、西の大路山の千眼寺からこの井戸まで銅管を敷設し、城中の飲料水を確保するため引いていたとの言い伝えが残っていますが定かではありません。

十一 遺構群

堅堀群

敵がこの城を攻めたとき、敵の兵士達が横移動ができないようにするための堅堀が、自動車道路の大手割り付近から南千畳にかけての斜面で見ることができます。また、観音寺山山頂から竹田向きに一本の大堅堀と、三の丸東側から南千畳の東側までに八本、南二の丸の西側に五本の小規模な堅堀（畠状堅堀群）が現在も残されています。

石取り場

当時の城普請には、この古城山の山頂を中心に膨大な石材を調達していたものと思われます。この山の山頂付近では、二の丸東側と南千畳の東側から尾根付近の四か所を含め、六か所の採石跡が残っています。

太田垣氏居館推定地

竹田城の北側の安井集落西側山麓部に、竹田城から延びる二本の尾根に囲まれた周囲より一〇メートル程高い所があり



太田垣氏居館推定地



石取り切跡



朝来山櫻



朝来山の桜と遠景

ます。ここは、地元で「トクサン風敷」「黒田大夫」と呼ばれ、古くから太田垣氏の居館跡と言い伝えられており、赤松氏以前の城主が住んでいた館の跡ではないかと思われます。

十二 城跡からの眺望

この城跡の天守台に登つて眺めてみると、南に中國山脈や朝来連山の山々が、東には円山川の対岸の金梨山と山東町の粟鹿山、遠くは丹波の大江山まで眺望することができ、天候の良い日には遠く北但馬の山々も望むことができます。

古城の天守の上によじ登り

木尾見づれ大江山もすこし

富田碑花

とも詠まれています。

春には、対岸の朝来山山麓に赤松廣秀が苗木を各地から取り寄せ、前庭に見たてて植えたと伝えられる山桜が、手に取るようになるとその風情は特に絶景です。

山桜 らるを惜しめと ひらむらと

京極杞陽

この花に 武将ほろびしものがたり

京極昭子

また、夏から秋の冷えた早朝には、すばらしい雲海が発生し、雲海上に浮かぶ城跡の姿はとても美しく、これを写すために未明から城跡に登る人も多く、大変すばらしい写真が数多く撮られています。

秋は紅葉の山々を背景に、冬は雪景色等をこけむす城跡の石垣はそれぞれ四季を通じて風情ある顔となり、写真の題材にこと欠くことはありません。

南千豈には明治三十二年に

夏草や 兵どもが 梦の跡

芭 蕉

の碑が建てられています。

また、城下の街並みは、往時から播但道、山陰道の接点にあり、交通の要衝として重要な地の山頂に竹田城を築き、東側山麓に広がる河川氾濫原を自然の要害として防御された絶好の位置に、寺社仏閣を防衛施設として南北と東に配して形成したるものと思われます。



寺町通りの風景



南千豈の碑

十三 登山道

昔から城跡への登山道としては

(一) 赤松公の屋敷跡に建立されたという駅裏の法樹寺北側
から大手口に至るルート

(二) 竹田の古城山の山麓に祀られた袴糸神社の裏を経て南
千疊に至るルート

(三) 町の下の觀音寺山山麓の恵眼谷から大手口に至るルート

(四) 西側の安井谷から大手口に至るルート

の四コースが登山道といわれています。

昭和七十年に、新しく新町の町頭から与一谷の北側を通
り大手口まで至る極狭の登山道路が、宗教法人大本教と竹田
町の手により新設されました。その後、昭和四十年代に現在
の自動車道路に新設改良が進み、今では国道三一二号線沿い
の久世田地区からと殿地区からの二つの道路が大手口へ通じ
る自動車道として完成しています。

十四 城下町の移り変わり

竹田城の築かれた古城山の山麓と円山川の間を南北に細長
く軒を連ねるのが竹田の城下町です。「竹田」の名がいわれ



新町の牌と登山口

るようになったのは、山名宗全が部下の太田垣氏に城普請を命じてここに城を築き、城主として住まわせるようになつたころからのことと考えられます。

また、天正五年の羽柴小一郎秀長が軍用道路を完成させたことにより、この道路を中心として山麓には城主や武家屋敷を配置した城下町をつくり、秀長が、出石、和歌山、郡山に城を築き「市」を開くための町づくりを行つたことと同じ手法であつたのではないかと思われます。

今でも、山麓に残された寺町通りの城主などの屋敷跡（法樹寺・勝賢寺・常光寺・善證寺）には、見事な石垣や石土台などが美しい白壁等に守られながら大切に残されています。

一方、町内の民家の中には、天正年間の竹田の城づくりのために、京都から来た宮大工の末裔といわれる二宮氏、長谷川氏などの家々が数代にわたり住み継げられており、また、この町づくりのために各地から移り住んだことを示す播磨屋、姫路屋、加古屋、丹後屋、宮津屋、栗瀬屋、額田屋、岡田屋等々の屋号が最近まで残っていました。また、業種名には組屋、塗屋、木綿屋、漆屋、味噌屋、歛ぶろ屋、鍛冶屋などの中持つ家が多いことがあげられます。

大正年間までは、旅館、料理屋、旅籠、腰掛茶屋、菓子、魚、雜貨屋などの商店が軒を並べ、漆器、家具を業とする店も数多くありましたが、いまだ町特産の竹田の家具以外はほとんど姿を消してしまいました。



古い町並み風景



表木押村の相模鉄道

当時、組、指物、蚊帳、布団、漆器などを行商して生計を立てていた人が多く住んでいた関係上、遠くは福井、島根、九州まで足を延ばして商いを行っており、今でも「竹田商人」の名前が遠方で呼ばれています。

しかし、慶長十五年（一六二〇）、宝曆十二年（一七六二）、明治十年四月三十日（一八七七）の大火灾により城下の家屋の大半が焼失し、さらに、水害などで往時の城下に関する建造物や記録などが消滅したことは非常に残念でなりません。

十五 竹田城に關係する寺院・神社など

寺院については、駅裏を中心六か寺がありますが、これらすべてが創建当時からの位置を示しているのではなく、竹田城が魔城になり、城下町の機能を失つてから後に現在の位置に移されています。

また、神社については、二つの大きな神社が造営されていますが、その創建については、嘉吉年間から文禄・慶長期にかけてであります。したがって、竹田城成立と密接にかかわっており、城と城下の防護的施設として巧みに配置し城下町を形成していたことがうかがえます。

見星山 法樹寺

天正六年（一五七八）勝豊ノ開創、暁萬院と号して川原町（現在の東町）に創建。慶長十一年（一六〇六）祇園のとき、竹田城最期の城主赤松廣秀公の旧館を詣うて現在地に移る。（竹田誌）以前は境内に赤松氏時代の建築物の一部（米蔵）があり、その建物の中には朝来山中腹の温泉郷にあつた薬師堂が移されて祀られていました。しかし、平成十六年に発生した台風二十三号の被害を受け建物

は流失しました。また、城の扉と赤松夫妻が愛用していた膳、椀も寺宝として大切に保存されており、庭には芭蕉塚の碑が建立されています。

境内の裏手には、赤松廣秀公の墓碑が祀られています。その参道には駿河の登山道に建立されていた西国三十三ヶ所の石仏が、住職の手により現在地に移設され大切に祀られています。

虎城山 勝賢寺

天正五年（一五七七）以前に、金梨山山麓の追間村口（現在の和田山病院北側）に創建と思われる。

寛文年間（一六六一～一六七二）に現在地（赤松公の家臣、平位善右衛門の館跡）に移ると朝来誌にあります。

桑山修理太夫重晴城主（一五八一～一五八五）の長子夫婦の墓碑と伝えられる五輪塔が二基ありますが、詳しいことはわかつていません。

黒田山 常光寺

文禄三年（一五九四）、金梨山の麓に創建。慶長十五年（一六一〇）に現在地へ移されています。（朝来誌）

初代城主太田頼光景（一四五五～一四七九）の菩提寺として墓碑があり、大切に祀られています。また、但馬で一番古いといわれる石灯籠があります。

慈雲山 善證寺

暦応元年（一二三八、南朝暦では延元三年）金梨山山麓に創建。寛永二年（一六二五）現在地へ移されています。（朝来誌）

当山には、竹田城にかかわりのある模絵が保存されています。

石 橋

寺町通りの四か寺の正面入口に、石橋が架けられていますが、このなか



寺町通りの風景

の一基に但馬で最も古い宝永四年（一七〇七）の文字が刻まれています。これらはいずれも江戸時代に造られており、但馬で確認されている七基の石橋の内五基がこの竹田地区に集中しています。

吉祥山 普音寺

天文年間（一二五二～一二七〇）に、現在の院寺町に創建。天正年間（一五七三～一五九二）に、現在地へ移されています。

卷之三

日下部氏の祖、表采親王を祀る。天正九年（一五八一）加納丘（久世町）に創建。天正八年（一五八〇）焼失。その後、大正十四年（一九二五）町の西と加納丘（久世町）の二ヶ所に建立。宝永七年（一七〇〇）現在の古城山中腹三本大杉に、本殿、舞神殿、神官邸を建造する。太田城氏の菩提寺といわれています。（兵庫県神社局）

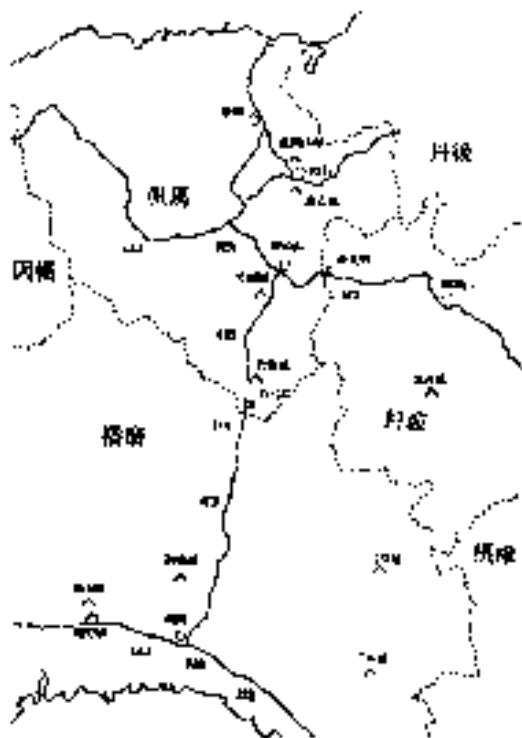
腰陽神社

嘉吉年間（一四四一～一四四四）金栗山山麓に肥前長崎の源
説神社の複数を模して山名宗全によって創建され、竹田城の
守護神として尊崇するとともに、領内の鎮守として難民に教
神の命を教えました。（朝来蔵）

この神社では、1月の秋祭りに勇壮な御輿の川波御と町内巡行のお旅が隔年ごとに、本宮祭早朝の朝霧煙るなか嚴廟に渡御が執り行われています。

番慈院千眼寺跡

創建時期は不明ですが、竹山城築城と同時に建立されたと思われます。竹田城西側の大路山の流谷の湧き水を、竹田城まで二キロ



竹田城の歴史關係地圖

メートルにわたり鋼管を埋設して送水し、その水源を守るために寺院を仮装建立したといわれています。古老の話では、羽柴小一郎秀長の竹田城攻略の時に老婆が秀長に寺院のありかをつげ口したため、太田垣輝延が敗れたとの言い伝えが残っています。

つわものゝ並居しあとやかぶと花

魚善和尚

十六 いにしえの郷

一 加都郷

竹田城跡の北東に位置する加都郷は、日本書紀にも登場する集落で、応神天皇（二七〇～三一〇）の時代には、百濟の國から王仁（わに）という人物が論語や千文字を持参して來日、唐の國からは弓月君や秦氏一族が養蚕や絹織物の技術を持った渡来人が來日しており、大陸文化を盛んに取り入れるなど開拓的な時代でした。

その技術者の一部がこの地にも派遣され、加都平野部（通称 加都千石）に桑を積え養蚕を奨励したことで、それ以降耕織物が多く産出されるようになつてきました。また、この地区には秦氏の墳墓だと伝える「王塚」が集落の中央に大切に祀られています。

二 歓喜光院（養賢院）

大化の革新の七世紀ころ、わが国では唐文化の吸収に懸命で、遣唐使の往来も頻繁に行われていました。聖武天皇は奈良薬師寺の僧行基に命じて奈良の大仏建立に着手しています。天皇は、行基の功績を賞めて施入田を与え、畿内に四十九院の大寺院建立を許されています。



「王塚」

行基は、四十九院の一院を、金糸山北方に面する加都郷を「この世にも希な聖闇の地」であるとして、莊嚴な美質院を創建しています。またの名を「歎喜光院」といいます。

この加都郷には極楽寺・蓮華寺・惠林寺の三か寺が堂宇を祀り、七堂伽藍等々二万坪の山内に莊嚴華麗な大殿堂が極楽淨土を現出し、鐘声は朝夕夕方に三宝の聲を響く鳴らし、羅刹谷には普賢院、安井谷には一乘院という分院が建立されています。

三 歆喜光院の焼き討ち

朝來郡太領（日下部郷主）は、大の敬神主義者で、日本は神の國である。しかるに他国の邪教仏教を祀り庶民を惑わすことは、國を滅ぼすことであると法燈音盛を説き、太領と歎喜光院との間に大きな講が生じ何かと紛争が絶えませんでした。時に延暦元年（七八二）、両者の争いは極意に達し、昨日まで供奉を説いた法の大慶堂もことごとく郷主の軍兵の電光石火の奇襲をうけ、極楽寺・蓮華寺・惠林寺も側院の普賢院・一乘院とともに鳥有に帰し人の世の眞れを留めるに至っています。

この時、歎喜光院の主僧大権僧正光信法師は、一四、五名の徒僧に守られ兵刃を東河原尾山中に廻ることができました。その翌年の夏、太領郷主は世を去り、やがて郷主の長子日下部太郎貞休が太領職を繼承しています。

貞休は父の郷主の余りの暴虐を嘗め、歎喜光院を焼滅させた罪を恥じ、承和元年（八〇四）室尾山に法下寺の一院を寄進しています。

この法下寺の本尊悲願如来像は、歎喜光院当時の名作と伝えられており、仁王門の仁王像並びに少室の十数体の本像は、藤相村普賢院遺跡の本像と形狀刀彫を一つにするもので、いずれもその體を過れた歎喜光院に連なる遺品であることがうかがえます。字地名も残っています。加都の歎喜光院の跡は、現在も地名に古い面影をとどめており、極楽寺・蓮華寺・惠林寺はそのまま地名となつております。逆脚堂院の馬場と称されている田園もあります。その他、大石好籠古といわれている巨岩・石仏など歴々として今も古代を良しく物語っています。



歎喜光院の跡石碑

四 北野天満宮

文明五年（一四七三）、加都郷安井の庄に、どこからともなく流浪の無に疲れ病に悩む一人の修業者が足を止め静養をしていたが、自分の命を知ったのが里人をまねいて、「長い間大世話になつたが命數が尽きた。ついでには、ここに一体の大自在天満天神の木像を奉持しているので、これを祀ると想定、坂神は立ちどころに退散するであろう。」と道ばとこの世を去っています。村民はその修業者を丁重に弔うとともに、この大自在天満天神の像を殿・奥（現・三波）・加都の鎮守神として、安井の向山の麓を切り開き、社殿を造営し大切に祀っています。

五 元文一揆

元文二年（一七二八）十一月二十九日、朝来郡の農民（主に山田、和田山）三十人余りが郡原をかかげ竹田の河原に終結し、大争して生野代官所に貢租の減免と夫食（致抜本）の貸付けを強訴した「元文一揆」がおきています。

この時、代官の小林孫四郎は農民の要求を全面的にのみ、不作の者は免租、その他の者は三割の減免、さらに一〇〇石につき二〇石の夫食を貸して与えるとの証文を渡していますが、これは易歎回覆のための空約束であります。

農民が引き上げたあと、代官は一揆の首謀者を捉え、二十三名に死刑等の紙罰を申し渡しています。安井庄農村庄屋 佐兵衛（四十三歳）、安井庄農村百姓 犀右衛門（二十七歳）他三名が京都で詰ち首のうえ竹田下河原において五日間剥首の刑に処せられています。また、加都市場村庄屋 枝田孙兵衛（四十九歳）、安井下村の市三郎（三十二歳）他六名は巻岐の島に逐島に廻せられ、いざれも巻岐の島の土となるなど大変厳しい処分でありました。

「元文一揆」の樹田耕作の書



小林孫四郎が逃亡官として呼ばれていたのに対し、三十八年後に生野代官として着任した子供の小林孫四郎政用は、堤防を改築するなし善改を行つたことにより、村民に慕われ「小林大明神」として祀られています。

六 高瀬舟と新川溝

宝暦三年（一七五三）、磯野屋龟松が生野代官の許しをもらい、円山川の清流を利用して船（高瀬舟）で荷物を豊岡まで運ぶ運賃業を始めるために、加郡の西雨の朝来川から面鏡溝（新川溝）を新たに造営しています。この新川溝の新設により加都の百余町歩は言うまでもなく、下流の比治、市御堂、法興寺、牧田地区の三十余町歩の農地が今でも大きな恩恵を受けています。

七 紺屋溝

竹田町内は大洪水のたびにその水のはけ場に困っていました。文政二年（一八一九）の大洪水時にも、町頭（新町）の堀跡が崩れ、町内が泥濘となつたうえ悪疫が発生したり、たび重なる大火災の被害をうけるなど永年困っていました。

竹田上町の紺屋治右衛門は、新しい井戸と新しい溝を造る必要があると、自ら私財を投じて調査設計を行い町役場へ提出するなどその実現に奔走し、文政七年（一八二四）に竹田の上の円山川に新しい井戸と新町西裏に新しい溝を作り、上町から下町の円山川までの町内を貫通する幅一間半、総延長三二〇余間の古い溝を改修し、現在の竹田川としてその大事業が完成しています。

この溝の完成により、川に接する者の中から新たに水車による商いを行う者も出てくるなど、当時としては町を挙げての新しい産業振興策であったと思われます。

地区住民は、この治右衛門の功績を讃え記念碑を建立し、この水路を「紺屋溝」と呼び、現在も大切な防火用水、農業用水として大いに活用されています。

しかし、古文書によると、この事業の実施にあたり加郡郷の市場村、寺内村及び市御草村と竹田町との間に於いて農業用水の水争いが度々発生し、生野代官所等への訴訟を起こすなど大きな問題に発展したこともあり、苦難の大事業であったことがうかがえます。



網屋舟（現在の竹田川）

十七 昭和の竹田の町づくり

昔は、城跡に立つて東を望むと山桜の名所「立雲峠」を一望することができ、その麓は「出作」と呼ばれる棚田がつづき、隣の山東町へ通じる山道が一本あるほかは人家もなく、美しい黄金色の樺林で一面に埋めつくされていました。

昭和四十年代に入り、ここに福祉施設をとの声が高まり、昭和四十二年公立北兵庫整形外科センター（現在の朝来和田山医療センター）が最初に建設され、その後、県立老人休養ホーム立雲莊、県立北兵庫のじぎく園（現在の県立和田山特別支援学校・小・中・高等学校）、聖隸福祉事業団の重度身体障害者授産施設恵生園、同療養施設貞生園、特別養護老人ホーム平生園、デイサービスセンターさくらの苑などが相次いで建設されました。

最近では、「山城の郷づくり構想」に基づき国史跡の竹田城跡、県立自然公園の立雲峠、寺町通り、水辺の楽校、山城の郷等々の整備が進み、立雲峠の桜まつり、秋祭り、お城まつりなどの伝統行事等を活かして、「観光による町づくり」が町と地域を挙げて取り組まれています。



平成の安井谷の風景



山城の郷（満たけ）



平成の幻の天守閣



平成の幻の天守閣

十八 平成の幻の竹田城

平成元年十一月文化庁の許可を得て、角川映画「天と地」とのロケーションが地域住民総参加の中で大々的に行われました。城跡には三億円の巨費を投じた天守閣や大手門、櫓等のセットが本物の城郭のように建設され、まるで竹田城が一夜にして出現したかのようだに大変感激したものです。

町では、竹田城の出現によりライトアップをするなどその対応に大騒動、竹田の街は連日連夜大勢の見物人であふれ、自動車道路や登山道は数床つなぎとなり多くの見物人達で賑わいました。

十九 ふるさと散策

一月	一日	新春マラソン大会
一月	十日	十日えびす（二宮神社（和田山））
一月	十七・十八日	厄神祭（益間・加都神社）
二月	春分の日	百々手祭（様野神社（久曾引・注〔女人祭調〕））
三月	上旬	吉光橋荷大明神初午祭（竹田）
三月	上・下旬	立雲峠桜まつり（朝来山）
四月	中旬	糸井溪谷桜まつり（糸井溪谷）
四月	中旬の日曜日	虎臥大明神祭（わだやま・竹田）お城まつり（竹田）
六月	上旬・中旬	サクラランボ狩り（野村（東河内））
七月	第二日曜日	川すそまつり（土田（大穂））
七月	第二回陣屋祭	寺内ざんざか踊り（山王神社（糸井））
七月	二十三日	竹田松明祭（愛宕神社・竹田）
七月	午の日	吉光橋荷大明神夏祭（竹田）
八月	十六・十八日	竹田地蔵まつり・栄町地蔵まつり（竹田）
八月	二十五・二十六日	和田山夏まつり・地蔵まつり（和田山）
九月	上旬・下旬	フルーツランドアドウ狩り
九月	重和田・久世田・寺内・高生田	重和田・久世田・寺内・高生田

十月	勢石神明主祭音	竹田秋まつり（竹田）
十月	磐原祭事主祭音	和田山秋まつり（和田山）
十月	中旬	和田山町食文化まつり
十一月	上旬	和田山町内
十一月	中旬	吉善祭（石鎚神社（宮））
十一月	上旬	和田山町文化祭
十一月	中旬	和田山町駅伝大会

二十 地場産業と特産品・お土産

- ◆手ぬりの紳札家具 ◆金剛バキ ◆黒大豆 ◆朝来のお米 ◆かぐら煎餅 ◆黒豆みそ ◆カニヒメ馬鹿の料理
- ◆サクランボ ◆豊津ねぎ ◆竹田城カレンダー

※右記以外にも多くの土産物を現在開発中ですので、お近くのお店でお尋ねください。

二十一 觀光コース

〔町内の代表的観光地〕

〔竹田地区〕

「竹田城跡」「寺町通り」「赤松廣秀墓碑」「太田原景良墓碑」「但馬吉野の立雲峯（山桜）」「山城の郷」「忠貞城大橋」「大将軍スギ」

〔糸井地区〕

「郷土歴史館」「糸井の大カツラ」「糸井溝谷」「床尾山」「雨石落石跡」

〔大蔵地区〕

「つづじ公園（松寿公園）」「奥山地蔵巡り」「高田の一本橋」

〔和田山地区〕

「赤瀬神社」「但馬六十六ヶ所地蔵四十四番地蔵」

〔東河地区〕

「百井大町公園（フジ）」「夜久野高原（八十八ヶ所巡り）」「心誠尼寺碑」「木月庵」「サクランボ狩り」「アドウ狩り」

【代表的町内観光コース】(1日)

一、《徳島吉野「山桜の立雲峠」と「竹田城跡」歴史ハイク》

竹田寺町通り→竹田城跡登山口→竹田城跡天守台→南千疊→但馬吉野の立雲峠

二、《「竹田城跡」と山城の郷歴史ハイク》

和田山駅→赤瀬神社→乳ノ本庵→山城の郷→竹田城跡→寺町通り→竹田駅

三、《「竹田城跡」歴史ハイクと糸井渓谷散策》

わだやま観光案内所→寺町通り→竹田城跡登山口→大手門→北千疊→天守台→南千疊→山城の郷
→郷土歴史館→糸井渓谷

四、《歴史ハイクとフジ観賞》

和田山駅→水月庵→心涼尼墓碑→吉井大町公園→夜久野駅

【広域観光コース】(1日)

一、《史跡生野銀山と「竹田城跡」歴史ハイク》

生野銀山→銀山湖→寺町散策→竹田城跡→山城の郷

二、《朝来芸術の森と「竹田城跡」歴史ハイク》

朝来芸術の森→多々良木ダム→寺町散策→竹田城跡→山城の郷

三、《山東ヒメハナ公園と「竹田城跡」歴史ハイク》

わだやま観光案内所→竹田城跡→山城の郷→寺町散策→ヒメハナ公園→夜久野高原

四、《「竹田城跡」歴史ハイクと出石城》

わだやま観光案内所→寺町散策→竹田城跡→山城の郷→出石城

22 竹田城関係略年表

年号	西暦	記事
永享 3	1431	山名尚宣、竹田城構築に着手する(口碑)
享吉 3	1443	竹田城完成する。上名松原、初代城主として太田川光景を配すという(口碑) (注) 太田城隣郷の御井城字とする説もある
享徳 4	1455	山名尚宣、播磨の赤松則祐を攻める。太田政光景、先陣として参戦する(「幕占記」)
慶正 6	1465	太田透景近、第2代竹田城主となる
永仁 1	1467	「丸の乱」おさる
応仁 2	1468	細川軍、朝倉軍に敗北する。栗原三界・赤近(新兵衛)、夜久野にてこれを取え撃つ(「院記」)
文明 11	1479	太田透宗親、第3代竹田城主となる
延暦 4	1482	太田透良親、第4代竹田城主となる
大永 1	1521	太田秀宗男、第5代竹田城主となる
天文 7	1538	太田朝親正、第6代竹田城主となる
天文 11	1542	朝連、生野義正に銀山を奪く。山名祐豊支配する
弘治 2	1555	朝連、如意から銀山の領有権を奪い取る
永禄 12	1563	木下藤吉郎秀吉、伊馬を攻める。生野銀山から北岡山城まで10日間で1日城を陥落させ(「柴田家代書」)
永禄 13	1570	太田山城主、第7代竹田城主となる
天正 1	1573	飛利源、伯耆から白河城へ入居する。但馬侵攻の策定を終した山名祐豊・太田山・相模、出羽守ら長老軍に賛成する(「兵庫歴史」)
天正 3	1575	丹波南井城主伊野直正、11日城・青子山城を攻めし。奪取する明智光秀、丹波を攻撃する。安野は芦井城へ逃く(「古川家文書」)
天正 5	1577	約束外石、播磨を半定したのち、小一郎秀長をもって但馬を侵攻する 「山口・岩瀬の内城を攻めし、此のいきおいかって小(い)田山氏がにてこもる竹田へ攻めかかって、これもまた速勝させるとすぐ高鍋を急じて、第の木下(い)一郎(秀長)を城代として入れおく。(「信長公記」) 秀吉、室尾山城を改修を放ける
天正 6	1578	秀吉、再び(い)一郎秀長を竹田城に入れる(「信長公記」)
天正 8	1580	小一郎秀長、秀吉の三木城攻めに加わる
天正 9	1581	秀吉、伊賀を攻撃する
天正 10	1582	木下小一郎、竹田城を陥落させ、城を改修し人数を入れおく。
天正 11	1583	(「秀長公記」) (この時点では、太田山の竹玉城は残る)
天正 12	1585	豊明、鳥取城攻めに参加する
天正 13	1586	山本輝理太夫直晴、竹田城主となる。所持: 10,000石(「藩輪廻」)
天正 14	1587	直晴、猪ケ森合戦に出陣し、奮闘をあげる
天正 15	1588	直晴、初歌山城代として移封される
天正 16	1589	直秀、九州・肥後城主に改められる
天正 17	1590	直秀、後陽成天皇の深草殿への行幸に出行する
文禄 1	1591	直秀、小国改めに550人を率いて参戦する
文禄 2	1592	文禄の役、広島、大村、佐賀に「もくそ姫」(高砂姫)を取り回む
文禄 3	1593	直秀、伏見城攻撃に参戦する。この時、22,000石
慶長 2	1597	慶長の役、広島、岡山に現れる
慶長 3	1598	(秀吉、大阪城に没す) 広島、西寧に武田・丹波・近江の三城を攻める。西寧敗戦後、鳥取城攻めに加わりるが、大火の炎舟を防ぐ鳥取・西寧守で3万する(10月28日) 竹田城・堺城となる
慶長 5	1600	鳥取代官所支配下となる
元和 1	1615	久美浜・生野(明治2)・豊前守(明治4)に属する
明治 1	1868	鳥取守に編入される
明治 9	1876	竹田町役場の所有となる
昭和 4	1939	國史跡に指定される
昭和 8	1943	竹田町役場の所有となる
昭和 31	1956	竹田・柳川川・萬伊各町の合併(現在山田町)により、大字竹田(竹田町地区)の所轄となる
昭和 45	1971	石垣復元工事が着手する
昭和 52	1977	「竹田城保存更造計画(案)」を策定する
昭和 55	1980	若世は元江原を完了する

「国史跡 竹田城跡」

竹田城跡（別名「虎臥城」）は、兵庫県和田山町竹田の古城山の頂（標高353.65m）に築かれた山城です。この城は、多くの大名が勢力を競いあつた1477年～1568年の「戦国時代」に、この地方の有力な支配者であった山名持豊（宗全）が、15世紀半ばに要塞戦略拠点として七盛の砦を築いています。16世紀後半、豊臣秀吉の命を受け但馬に侵攻した毛利小一郎秀長が、その砦を利用し新しい城郭構造を手がけ、その後、赤松廣秀が豊臣秀吉の支援を受け、現在のような豪壮な石積みの強度な城郭（総面積18,700m²、南北約400m、東西約100m）に造りかえたと言われています。この城の石垣の特徴は、自然の石を用いた「穴太深」の技法で築かれており、山の地形を巧みに利用しながら曲輪や櫓台を階段状に配置し、中央の最高所には天守台が築かれています。竹田城最初の城主赤松廣秀は、近世儒学の祖である藤原惺窓と友人で、慶長の役（1597年）で捕虜となつた朝鮮の儒学者姜沆に儒学の教えを請い、「四書五經」の解説の作成を依頼しています。廣秀は、そのお札として船一隻と食糧を用意し帰國への協力を図ったことは有名です（香羊錄）。このことは、廣秀が城主として農業や貿易を興し、領下を鍋底物の产地として、また、城下町竹田を産業などの振興にも尽力したことと関係ではなく、廣秀を「仁政の君」と尊び、民が行う祭礼（お城まつり）は儒学者藤原惺窓の説いた儒教の教えであると、今でも語り継がれています。

今後とも、全国に跨る貴重なこの歴史遺産を、地域住民とともに大切に守り次の世代へつなぎたいと思います。

일본의 역사유적 竹田城跡

竹田城跡(虎臥城)은 兵庫縣和田山町竹田의 古城山의 성상에(표고353.65m) 구축된 산성입니다.

이 성은 망은 라이도(大名)들이 세례다름을 하던 1477~1568년의 「전국시대」에 이 지역의 유력한 지배자였던 山名持豊가 15세기 중반에 중요한 전략적인 기점으로 죠으로 만든 城郭입니다.

16세기 후반기에 豊臣秀吉의 명령으로 但馬시방을 창공한 毛利小一郎秀長이 이 성시를 이용해서 새로운 축성공사를 시작했으며 그 후에 赤松廣秀가 전국을 평정한 秀吉의 지원을 받아 현재와 같은 웅장한 석성 (총면적 18,700m², 남북 약 400m, 동서 약 100m)을 축조했다고 합니다.

이 성의 동담과 목장을 주로 자연석으로 축조되었다는 것입니다. 산의 지형을 교묘하게 이용하여 曲輪과 樓台를 계단식으로 배치하고 중앙의 가장 높은 곳에는 天守台를 축조하여 서로가 잘 어울리고 있다는 것입니다.

竹田城의 마지막 성주 赤松廣秀는 구세유학의 시조 藤原惺窓의 후원입니다. 1597년에 秀吉가 조선에 개침할 때 일본군의 포로가 된 조선의 유학자 姜沆에게 四書五經의 정서를 요청했습니다. 广秀가 그 보수로서 데 한복과 쇠량을 구입하여 그들이 대국하는 데 협력했다는 것은 유명한 이야기입니다.

이러한 사실은 广秀가 成主로서 농업과 양잠을 진흥시키고 양로를 견직봉의 산지로, 또한 竹田를 가구와 철기의 명산지로 발전시킨 것과 무관한 일은 아닙니다. 따라서 广秀를 「名君」으로 존경하고 백성들이 기원하는 祭禮(お城まつり)가 유학자 藤原惺窓가 가르쳐 준 것이라고 치�까지 전해지고 있습니다.

앞으로도 전국적으로 자랑할 수 있는 귀중한 역사유산을 지역주민들이 험려해서 지키, 다음 세대에 이어지기를 기대하고 있습니다.

TAKEDA CASTLE RUINS

The ruins of Takeda castle (also known as Toratusu castle) are located at the top of Kojosan Mountain (353m) overlooking the town of Takeda in Wadayama, northern Hyogo prefecture.

Built during the feudal Sengoku period (1477-1568) by Mochitoyo Yamana, Takeda castle initially served as a temporary, strategically located, defense installation against the many daimyo (warlords) fighting for power at the time.

In the latter half of the 16th century, Koichiro Hidenaga Hushiba received orders from Hideyoshi Toyotomi to invade Tajima. Making use of the existing castle, he undertook the construction of a new one. Hirohide Akamatsu, backed by Hideyoshi who had conquered the area, completed the construction of the structure of which the foundation remains still. The completed castle, a formidable fortress, covered a surface area of approximately 18700m², extending 400m from north to south and 100m east to west.

The walls and foundation of the castle were built using natural, uncut stone and made excellent use of the mountain's geographical features. The natural terraces and variations in elevation acted as stairs and as divisions within the castle. The castle tower was constructed on the highest grounds. This unique style of architecture is called anoyu and ensures efficient use of the available space and materials.

Takeda castle's last inhabitant was Hirohide Akamatsu. Akamatsu, a friend of Seika Fujiwara (responsible for the introduction and development of modern Confucian philosophies), was granted the opportunity to study under the Korean confucianist Kunhan, a prisoner of the Battle of Keicho (1597). As a reward for his efforts in the writing of the book Shisho Gokyo and in the elaboration of a sutra, Akamatsu had Keicho released and organized for him to return to his homeland. This well-known and symbolic gesture is also written about in The Chronicle of Kanyo.

As lord of the castle, Hirohide promoted agriculture and sericulture in the area and founded the castle town of Takeda, famous for the quality of its silk products. He was respected by the people of the town and was often referred to as 'a man of the people'. Festivals were held celebrating the castle and the teachings of Seika Fujiwara; which have since been passed down from generation to generation.

The ruins of Takeda castle represent an important part of Japanese history and were officially listed a Japanese Historical site on September 8, 1942. It is hoped that the people of Wadayama will continue to work together in preserving this valuable historical relic for the benefit and enjoyment of our future generations.

【参考文献】

「参考・恒馬考」、「三日家文書」「相田上道氏口記」「史記」「因幡民謡記」「朝来謡」「兵庫県神社誌」「太田垣・赤松両氏と恒馬竹田城」「南恒馬出」「竹田記念誌」「武功褒詔」「古事記」「恒馬・和田山 史跡竹田城跡」「恒馬竹田城主赤松廣通と象田中通新右衛門遺品資料の研究」「世界に架けた歴史(著者著者)」「(著者著者)

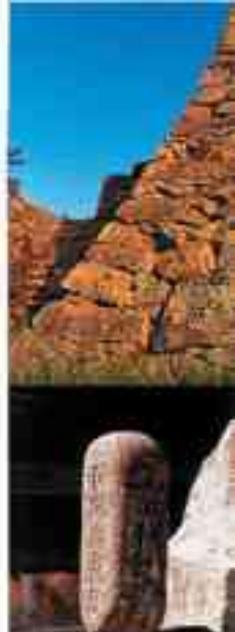
あとがき

この本の編集企画にあたりましては、観光ガイドブック的な役割を果たすために文章は短く、写真、図面、イラスト、図書などを多く盛り込むとともに、いにしへの時代感を新たに挿入し改訂版として編集を行いました。

この竹田城の歴史には種々な説がありますが、今則は、地域での伝承勢を参考に編集していくので、間違いかどうかは、たら是非ご指導をいただければ幸いです。

この本を作成するにあたり、委任者先生、和田山町教育委員会、町史編纂室、朝来郡庁域行政事務組合文化防護をはじめ多くの方々に多大なる指導・協力をいただきました。また、特に名前は記しませんが陰ながらご指導・支援していただいた竹山の方々に心から厚くお礼申し上げます。

発行につきましては、町の「支援をいただきこころに発行することができます」と、心から厚く感謝申し上げます。



和田山町観光協会

朝来市
<http://www.city.asago.hyogo.jp>
和田山町観光協会
<http://wadayama.jp/>